

有毒植物(3)落葉樹

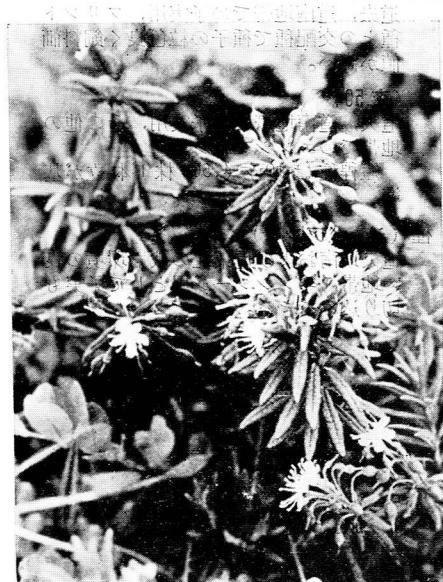
が田林へ北大薬学部教授 三橋謙介



ハナヒリノキ (ツツジ科)

北海道本州の山地に自生する落葉灌木で、高さ2mに達する。葉は互生し殆んど無柄、略長橢円形である。夏に若枝の先に総状花序をつけ、淡緑色壺形の小花がたれ下ってひらく、蒴果は扁球形で上にむく。葉の粉末は強いくしゃみを起こさせる。ハナヒリはくしゃみの意味である。有毒植物で毒成分はグラヤナトキシンとよばれるが季節により変化秋に最も多い。葉を乾かし粉にして便所に入れ蛆を殺すのに用い、またその煎汁は家畜の皮膚寄生虫を駆除するのに有効である。

北海道南部、本州、九州に広く分布、また平地にも自生する。観賞用として庭園にも植えられる落葉低木で1~2mの高さでよく枝分かれする。葉は倒卵形で先は鈍形または円形、ふちは全縁で毛があり、表面は光沢がなく、裏面はときに白色をおびる。春、新葉とともに開花し数個頂生し横向きにひらく、朱紅色で上面にはん点がある。花が濃朱紅色のものをコウケンゲ、帶紅黄色のものをカバレンゲ、黄色のものをキレンゲという。有毒成分はアンドロメドトキシンである。中国では羊がこれをたべると麻痺してよろめくという意味の名がつけられている。



イソツツジ (ツツジ科)



レンゲツツジ (ツツジ科)

北海道、本州北部の湿原または傾斜地にはえ、北海道以北（樺太、シベリヤ等）にも広く分布、常緑の小低木で高さ30~70cm、枝はよく分枝して茂り、葉は深緑色、革質で皮針形、葉柄は短く、枝の先に集まって互生し、全縁、ふちは裏面にそりかえり、裏面には白毛がはえるが時に赤褐色のものもある。夏、枝の先に短い花柄をもつ多数の白花を密につける。イソツツジはエゾツツジから転じたとの説もある。有毒成分レドールを含むが土地によってはこの葉を発汗剤等に用いる。